新響

東京労音 新交響楽団
第2回合同演奏会
1965年10月11日
日比谷公会堂

123
B3

ご あ い さ つ

皆様本日はお忙しいところをようこそおいで下さいました。

団員一同心より御礼申しあげます。

皆様方の暖い御支援により東京労音新交響楽団は本年を以って創立９年目を迎えております。創立当初は20名足らずでありました団員も現在では250名にならんとしており，団員数の増加につれてオーケストラの数も３つのオーケストラと１つのブラスバンドの４楽団となりました。申すまでもなく，私達はアマチュアであり，音楽を演奏することに悦びをみつけているものの集まりであります。

現在の私達の新交響楽団各団の持つ特徴を簡単に述べてみますと，まず３つのオーケストラのうち，＜第３オーケストラ＞は誰れでも入れるオーケストラという大きな特徴があります。楽器を始めたばかりの人でも，これに参加することが出来ます。もちろん楽器を始めたばかりの人といっても実際問題として無理なところはありますが，そのような人でもその人なりに合奏のたのしみを知ることが出来ます。これに対して＜第１オーケストラ＞は新響の頂点として存在し，技術的にはもちろんのことあらゆる意味において他の模範となる必要のあるオーケストラで，東京をはじめ，日本各地の労音例会等にも出演してまいりました。＜第２オーケストラ＞は第１オーケストラに続いて新響を代表し，技術的にもそれに続く団体で，第２オーケストラとして独自の活動は勿論やっておりますが，例会等にも早く出演することが待たれています。最後の＜吹奏楽団＞は設立当時はオーケストラ各団の管楽器奏者の集まりでありましたが，現在ではブラスバンド独自のメンバーを多数擁し，マーチバンドとしてではなくシンフォニックバンドを目ざしています。この吹奏楽団もオーケストラと同じようにまもなく，第２ブラスバンドが誕生することになると思われます。

さて，とかくアマチュアとは，「下手」の代名詞のように云われておりますが，アマチュアであっても決してそうあってよいはずはなく，常に最高のものを求めたいと思います。音楽に限らずなんでもそうでありますが，最初は単純な動機で始めたものであっても，又低い段階にあったものでも一歩ずつ，だんだんと高いところへ到達することにすばらしさがあります。私達はアマチュアとして，アマチュアイズムの精神を忘れず，音楽に対しては誠実で真面目な態度で接することはもちろんでありますが，技術的にももっと上達したいと願っております。それは技術を習得することによって，より深いものを感じとることが出来るからです。

又，アマチュアの音楽はともすれば自分たちが楽しければそれでいいという傾向がありますが，私達の新交響楽団は自分たちが演奏して楽しいというだけでなく，音楽する悦びを一人でも多くの人に頒ちたいと考えております。ごく限られた少数の上手な演奏家が存在することよりも，音楽する人が沢山いるということの方が音楽の発展向上にどれだけ大切なことでしょうか。音楽する人が増えれば，それに伴って全体的な質も又向上するのではないでしょうか。私達はもっと多くの人々に参加いただき，メンバーと団体の数を増やし，演奏の質も上げたいと念願しております。

最後になりましたが，アマチュアの演奏活動においてもこれを支える大きなものは，やはり私達の演奏を聴いて下さる聴衆の皆様方であります。

今夜ここにおいで下さいました皆様方に厚く御礼申上げるとともに，今後とも一層の御支援をお願い申しあげます。

1965年10月11日　　新交響楽団運営委員長　中　村　一　郎

東京労音　新交響楽団第2回合同演奏会

PROGRAMME

I　レオノーレ序曲　第3番　作品72—a　　ベートーヴェン
Leonore, Overture No. 3 op. 72—a　　Beethoven
(1770～1827)

指　揮　横山千秋
Conductor : Chiaki Yokoyama
管弦楽　新交響楽団第3オーケストラ
Orchestra : The New Symphony Orchestra (The 3rd.)

II　交響曲第8番　ロ短調 "未完成"　　シューベルト
Symphony No. 8 in B—minor "Unfinished"　　Schubert
(1797～1828)
1. 中庸の速さで
Allegro moderato
2. 遅めに　感動を以って
Andante con moto

指　揮　岡田和夫
Conductor : Kazuo Okada
管弦楽　新交響楽団第2オーケストラ
Orchestra : The New Symphony Orchestra (The 2nd.)

III　吹奏楽のための組曲——イギリス民謡の主題による——　　ホルスト
Suite for military band——on a theme by old English folk song　　Holsto
(1874～1934)
第1組曲　Suite No. 1
1. シャコンヌ
Chaconne
2. 間奏曲
Intermezzo
3. 行進曲
March

第2組曲　Suite No. 2
1. 行進曲
March
2. "ダルガソン" の幻想
Fantasia on the "dargason"

指　揮　斉藤好司
Conductor : Kouji Saito
吹奏楽　新交響次奏楽団
Brass Orchestra : The New Symphony Brass Orchestra

IV　交響曲第5番　ハ短調 "運命" 作品67　　ベートーヴェン
Symphony No. 5 in C—minor op. 67　　Beethoven
(1770～1827)
1. 速く活気を以って
Allegro con brio
2. 遅めに感動を以って
Andante con moto
3. 速く
Allegro
4. 速く
Allegro

指　揮　芥川也寸志
Conductor : Yasushi Akutagawa
管弦楽　新交響楽団第1オーケストラ
Orchestra : The New Symphony Orchestra (The 1st.)

1965年10月11日（月）午後 7：00 日比谷公会堂

心の交流を

合同演奏会によせて

丹羽正明

万葉の昔，大伴の某という歌詠みが，酒飲まぬ者の顔は猿に似たり，とかいって，アルコールの味を知らぬ人間をからかっていますが，こればかりは，どうも，呑ん兵衛以外にはわからない境地でしょう。が，かく申す私，実のところ全くの下戸でして，生まれがサル年とは因果なことであります。

音楽も同じことで，自分で楽器の一つもいじってみたことのない人には，音楽の醍醐味がわかるはずはありません。下手でも結構，演奏の味を体験することが大事なのですから。

音楽には，御承知の通り，作曲（創作），演奏，鑑賞という三つの立場があります。私たち一般聴衆は，その第三の立場を占める部類に属するわけですが，考えてみれば，その三つの立場の各々は，精神の働きとしては，全く同じものであるはずです。順々に考えて行きますと，まず，作曲家が作品を作ること，これは創造活動そのものです。次に，演奏家が作品を演奏するのは，作品の再現であることにはちがいありませんが，単に，元通りに復元するのではなくて，作曲家の心を，演奏という自分の行為を通じて追体験することなのですから，演奏家の心の中で，もう一度，自分なりの創造的精神の働きが行なわれることになります。そして次に，演奏を鑑賞する聴衆の側では，一心に耳を傾けて演奏に聞き入るわけですが，それは，ただ受身に音を聞いて良い気持になるだけではなくて，演奏を通して語られている演奏家の創造的精神に触れ，ひいては，作曲家の創造力の源泉にまでさかのぼって，感動をともにするという，これまた聴衆としての創造的精神の燃焼が行なわれているはずです。

こうしてみてきますと，作曲，演奏，鑑賞という，外見上はそれぞれ別種の行為が，根本的には，個人の創造的精神の働きという点で，全く同じものであるということができると思います。ですから，たとえ，自分で作曲をしたり，楽器を弾いたり，歌をうたったりという積極的な音楽活動をしなくても，鑑賞という行為の真の意義，即ち，創造的な精神活動としての音楽鑑賞の意義を正しくとらえるならば，音楽の真髄に触れることは容易であるといえるでしょう。

原理としては，いま申したようなわけですが，しかし，音楽には，精神活動のほかにもう一つ，技術としての側面があります。いかに豊かな精神でも，音という客観的な形となって表現されないことには，芸術の体裁がととのいませんし，したがって，他人に気持を伝えることもできません。如何に音を表現するかという，この技術は，直接かつ具体的なもので，実践による以外には，体験のしようがありません。はじめに，演奏の体験のない人には，音楽の本当のおもしろさがわからない，と申したのも，こうした理由があるからなのでした。

音楽に聴衆がいるように，スポーツには観衆がいます。野球，相撲，プロ・レスなど，ただ見て楽しむ観衆が，最近では非常に増加しています。野球の観衆の場合には，自分であの“すりこ木”の大きなやつを振りまわさなくとも，スタンドからゲームを眺めているだけで，結構楽しむことができますし，プレーの上手下手から，攻防の駆引，テクニックなども，相当程度に知ることができます。おそらく，平均的日本人の中で，野球のルールを知らない人を探す方が，むずかしいぐらいではないでしょうか。国家の基本法である憲法の細部をよく覚えていなくとも，野球では，ストライクを3つとられればアウトだとか，インフィールド・フライが何であるかとか，投手の防禦率の計算方法はどうやるかとか，細かい法則を，みんなよく知っています。こうした野球ファンの人たちが，さて自分でゲームをするかといえば，果してその何パーセントが実際にやっているか，その割合はずいぶん低いものだろうと思われます。それでも，草野球のスター・プレーヤーではなくても，キャッチボールぐらいは，誰しも経験のあることですし，ボールを投げ，バットをスウィングするあの感触は，みんな身に覚えのあることでしょう。

実は，その程度のことでもよいから，音楽の場合にも，実際の演奏体験が欲しいと思うのです。音楽会によく足を運び，家にはステレオ装置をそなえつけて，音楽を楽しんでいるファンがいても，自分では何もやらないというのでは片手落ちというものです。

それではというので，楽器をいじってみようということになると，これがまたなかなか厄介なもので，自分の思う通りに音が出るまでには，ずいぶんとお金と暇がかかるようです。だいたい専門の音楽家でさえ，年端も行かぬ子供の頃から始まって，10年も15年も，脇目もふらずに努力を重ね，友達が大学を出て一人前のサラリーマンになる頃になって，やっと演奏家の“卵”だなどといわれるぐらいが関の山というのですから，こんなに割の合わないものはありません。ことほど左様に，楽器の演奏というのは，むずかしいことなのです。しかしまあこ

れは，専門家として，人様の前で演奏をしてお金を頂戴するまでになる場合をいったのであって，自分が楽しみにやる場合には，下手であることから生ずる弊害は，直接自分に返ってくるだけで，至極気楽なものであります。

ですから，今夜のように，アマチュアのオーケストラを編成して，合奏を楽しむに至った方々は，すぐれた資質と，たゆまざる向上心に恵まれた，エリートと申すべきで，尊敬に値するものと私は考えております。

日本には，アマチュアの音楽団体といえば，まず合唱団があげられるくらいに，合唱は極めて盛んです。合唱は，もって生まれた体ひとつあれば，誰にでも楽しむことができます。オーケストラとなると，楽器を買うことから始まって，或程度の基礎訓練を受ける必要があったり，楽器の維持，管理，買い替えなど，いろいろと経費がかかるものです。それでも，こうやって，合同演奏会を開催できるほどに，各地でアマチュア・オーケストラが育っているのですから，本当にうれしいことです。

合奏の楽しさは，それこそ，やったことのあるものでなければわからないことですが，うまく行ってうれしく，失敗してもまたそれが楽しいという，はた目には理解のできない不思議な魅力にあふれているものです。心を合わせて一つの音楽表現に向って全力を傾ける姿は，美しいものです。

ところで，せっかくオーケストラをするのですから，上手になった方が良いわけで，そのための注文をひとつさせて頂きましょう。これは，また，プロのオーケストラを，ふだん聞いていて，感じていることでもあるのですが。それは，音を自分の耳で聞く，というごくあたりまえのことなのです。日本のオーケストラは，最近ではかなり上手になってきたようですが，外国のオーケストラにくらべて，いちばん目につく欠陥は，音色の濁っていることです。響きに生命力が足りないのです。アインザッツを揃えるとか，フォルテやピアノを機械的にうまく合わせて弾くとかいうことでは，相当程度に上達していても，出てくる音の響きに，生きた表情が欠けているのは，結局のところ，楽員の一人一人の心の中に，生きた音楽が燃えていないからだということになるのかもしれません。あるプロ・オーケストラで，こんな話がありました。練習の時，指揮台から立ち上った指揮者が，トランペット奏者に向って，「君のいま吹いた音は少し高過ぎる」と注意したところ，その奏者は，平然としてこう答えたというのです。「そんな筈はありません。私はちゃんと正しい指づかいで穴を押さえていたのですから」。彼にとっては，出てくる音よりも，指づかいの方に信頼がおけるのでしょう。これではアベコベです。音を聞かずに，もっと正確な云い方をすれば，その瞬間におけるアンサンブルの中での自分の音を聞かずに，合奏をしている滑稽な間違いが，ここにあるのです。オーケストラの音は，極端に云えば，絶えず流動しています。ピアノのように，調律したままの音をそのまま保って，最後まで行くことはありません。

たとえば，ベートーベンの「ピアノ協奏曲第5番<皇帝>」を例にしましょう。第1楽章の冒頭，はなやかなピアノのカデンツァが終ると，オーケストラだけが，相当長い時間をかけて，主題の提示を行ないます。やがてそこへピアノが半音階のスケールで入って来ますが，その時に，オーケストラのピッチと，ピアノのピッチとが，かなり食いちがっていることがよくあります。オーケストラの方が，そこまでに来る間に，管が暖まったりしてどんどんピッチが高くなってしまっているからです。心ある楽員ならば，それを見越して音を調整しながら演奏するでしょう。

もうだいぶ以前のことですが，マリアン・アンダスンが来日して，ブラームスの「アルト・ラプソディー」をたしかN響との協演で歌ったことがありました。その時彼女の調子が悪く，途中でどんどん音程が下って行くのです。しかし，うれしいことには，オーケストラの方が，それに合わせて音を下げてついて行きました。さすがに経験の豊富なオーケストラは立派なものだと感心したのを覚えていますが，それくらいの心のこもった演奏が欲しいものです。

アマチュアのオーケストラは，技術的に限界があるのは当然ですし，また余り上手になりすぎて，プロ・オーケストラに脅威を感じさせるのも気の毒ですから，ほどほどのところで我慢を，ということになるでしょうが，いずれにしても大切なのは，演奏中のお互の音を聞き合うということでしょう。そこから，また，真の意味での心の交流が生まれてくるわけです。しかし，これはもう百も承知のベテランの皆様には，釈迦に説法であったかもしれません。御成功を祈ります。　　（音楽評論家）

曲　目　解　説

Ⅰ　レオノーレ序曲　第３番　作品72のＡ
ベートーヴェン

ベートーヴェンは唯一の歌劇≪フィデリオ（又は夫婦の愛）≫のために四つの序曲を書いています。つまり第一番から第三番に至る三つの≪レオノーレ≫序曲と≪フィデリオ≫序曲です。歌劇≪フィデリオ≫は1805年，ウィーンのアン・デァ・ウィーン劇場で三幕もののオペラとして初演されましたが，これは今日残されたものとはだいぶ違っており，ベートーヴェンはこの後，数回の改訂を加え，序曲も書き改められ，結局10年後の1814年，最後の改作が行われ，あらためて上演されました。現在歌劇を上演する場合には冒頭にフィデリオ序曲が用いられ，第二幕の始め又は第十五曲レオノーレとフロレスタンの二重唱と第十六曲終曲の間にこの≪レオノーレ≫序曲第三番が演奏されます。ワーグナーはこの序曲を≪劇それ自身よりも完全に且つ効果的に劇を描き出している≫と云っていますが，劇の内容を知らない場合でも強い感動を受けずにはいられない音楽で，純音楽又は劇音楽のどちらの面からも，この曲の持つ偉大さを感じることが出来ます。曲はソナタ形式によるもので，オペラの中のフロレスタンのアリア二曲とトランペットのファンファーレを含んでいます。

Ⅱ　交響曲　第８番　ロ短調≪未完成≫
シューベルト

あらゆる交響曲の中でも最も演奏回数の多い曲といわれるこの名曲をシューベルト自身は生前一度も聴いたことがありませんでした。この曲は，いかにもシューベルトらしいロマン的な情緒に富み，美しい旋律を絶えず歌わせています。この曲を有名にしているのは，題名にある如く，曲が未完成で交響曲として全楽章が完成されておらず，第三楽章のスケルツオのはじめの部分をわずかだけ書いてそのままにされているからです。この理由については，いろいろの憶説があって，映画等にも随分採り上げられましたが，本当のところは解らないというのが通説です。それはさておき，この三楽章と四楽章を持たない交響曲は，形式上では未完成かも知れませんが，内容的には充分完成していると考えられます。シューベルトがこの曲を書いたのは，1822年，彼が25才のときでした。そして２年後にシュタイエルマルク音楽協会の理事アンセルム・ヒュッテンブレンナーにこの曲を贈りました。

当時シューベルトは，このシュタイエルマルク音楽協会の名誉会員となったので，慣例に従って交響曲をこの協会のために作ることになったのでした。そして1865年になって，指揮者のヨーゼフ・ヘルベックがヒュッテンブレンナーのもとから楽譜を発見し，同年の12月17日これをウィーンで初演しました。

第一楽章は，アレグロ・モデラートでソナタ形式に従っていますが，ベートーヴェンの曲の第一楽章のような激情や闘争的なところがありません。はじめに低弦で有名な旋律がでますが，これは再現部で現われないので第一主題とみなさないので普通です。大指揮者フィリックス・ワインガルトナーはこの旋律を≪あたかも地下の世界からのように……≫と評しましたが，この最初の三音からなる動機は，第二楽章においても大きな役割を果します。この暗示に富んだ旋律のあと，木管楽器が天上的な美しさを持つ第一主題を奏し，ひき続いて，チェロがロマンチックで高貴なそして清純な美しさに満ちた第二主題を奏します。

第二楽章は，アンダンテ・コン・モトで，やはりソナタ形式をとっています。導入部のホルンとファゴットで奏せられるメロディーにも，第一楽章の最初の三音がひびいています。コントラバスのピチカートに伴われて第一ヴァイオリンが主題を奏で，チェロが美しく対比します。この楽章は，たぐいまれな美しさの中にも深い悲しみをたたえている楽章であるということが云えます。

Ⅲ　イギリス民謡の主題による吹奏楽のための組曲
ホルスト

管弦楽組曲≪惑星≫を初め，多くの名曲を残し，≪パーセル≫の再来といわれたイギリスの天才音楽家≪グスタフ・ホルスト≫の吹奏楽のための作品で，一番二番両曲ともイギリスの古い民謡をもとにして書き上げられたものです。

イギリスは古くから吹奏楽が盛んな国で，どんな小さな町にも，又職場にも必ずといっていいくらい吹奏楽のバンドがあり，シーズンともなれば連日のようにそれ等のアマチュアバンドの演奏会があり，一般大衆に溶けこんだ吹奏楽という点に於いては，現在吹奏楽の盛んなアメリカやヨーロッパの国々にくらべはるかに古い歴史を持っているようです。

そして，高度な芸術音楽を書き，天才音楽家と称されているホルストが，イギリスで一番大衆に浸透している吹奏楽のために自国の古い民謡をもとにした作品を書いたという点，それと同時に，作曲家として知られる前は

優秀なトロンボーン吹きであったという事実を考えあわせてみると，私達にとっても天才音楽家と言われている≪ホルスト≫の別な一面を知り，非常に親しみを感じます。

イギリスの吹奏楽の特徴は，アメリカ吹奏楽曲のパレードを感じさせる様な華やかさとは違い，非常に落着いた響きを持っている事です。そして特にユーフォニュームが活躍する事は，この曲に限らずイギリスの吹奏楽曲の特徴といえるでしょう。

第Ⅰ組曲　　作品28のA

1. シャコンヌ

$^{3}/_{4}$のゆったりした曲で，低音の金管に始まり次第に楽器が増し，厚みを加えて行きます。最初の旋律が途中いろいろな楽器に受けつがれて出て来ますが，最後までこの旋律が続けられます。

2. 間奏曲

木管の細い動きに乗ってユーフォニュームが軽い旋律を奏した後，やがて木管がちょっと気ぜわしい節を吹きます。が，すぐ元の節にもどされ，その次に新しい旋律がクラリネットによって来，それもまもなく終り，最初の旋律にもどされて，いままで出て来た節が全部同時に演奏されてこの曲をとじます。

3. 行進曲

木管による激しいトリルのあと，金管によって軽快なマーチが奏され中間部へ続きます。中間部ではクラリネットが朗々と低音楽器をバックにして歌い上げ，最後は全楽器で今まで出て来た旋律を奏して壮大にこの曲をとじます。

第Ⅱ組曲　　作品28のB

1. 行進曲

このマーチは3つの民謡，即ち≪モリス舞曲≫≪白鳥の歌≫≪クラウディーバンクス≫から成り立っています。最初金管楽器が≪モリス舞曲≫を奏し，次にユーフォニュームが≪白鳥の歌≫を吹きます。中間部で$^{6}/_{8}$拍子に変り，クラリネットにて≪クラウディーバンクス≫が奏され，初めへもどります。

2. "ダルガソン"の幻想

これは弦楽オーケストラのために書いた≪セント・ポール組曲≫の終曲からとったもので，初めのサックスによる旋律が最後までとぎれることなくいろいろな楽器に受けつがれて出て来ますが，途中≪グリーン・スリーブス≫がユーフォニュームによって同時に奏され，最後はピッコロとバスが旋律を変形して吹き，細かい動きで曲を終ります。

Ⅵ　交響曲　第5番　ハ短調≪運命≫作品67

ベートーヴェン

曲の最初の動機について，ベートーヴェンが≪運命はこのように戸を叩く≫と云ったというシントラーの話は，あまりにも有名ですが，この第五交響曲は，ベートーヴェンの全九曲の交響曲の中でも特に有名であり，彼の交響曲を代表する作品であるばかりでなく，200年に亘る交響曲の歴史を通じても特に際立った作品です。この曲のもつ特徴について考えてみますと，私達はそこにベートーヴェンのきびしい音楽追求の精神と人間的な苦しみとの闘いとも云うべきものを見つけることが出来ます。曲の第一楽章の冒頭の動機は全曲を通じて循環的に使用され，全体としての構成に統一性を与えており，又，勝利を現わす圧倒的なフィナーレにおいては，従来の二管編成に新たにピッコロ，コントラファゴットと三本のトロンボーンを加え，音の増強や色彩感に新しい分野を開いており，この曲の持つ劇的な構築性にゆるぎない生命力をあたえています。

この曲はすでに1803年のスケッチに楽想があらわれています。が，完成されたのは1808年であり，約五カ年にわたって推敲を重ねられましたが，この頃の代表的な作品としては交響曲及びピアノ協奏曲のそれぞれの第一番から第四番まで，ヴァイオリン協奏曲，ピアノ奏鳴曲第一番から第二十三番≪悲愴・月光・ワルトシュタイン・熱情等を含む≫，ヴァイオリン奏鳴曲≪春・クロイツェル等を含む≫，弦楽四重奏曲第一番から第九番まで及び歌劇≪フィデリオ≫等があり，これらはいずれも第五交響曲の楽想が芽生えてから完成するまでの間に生れた傑作です。尚この曲の初演は，1808年12月22日ウィーンのアン・デァ・ウィーン劇場でベートーヴェン自身の指揮により，交響曲第六番ヘ長調≪田園≫，ピアノ協奏曲第四番，及び合唱幻想曲等とともに行われました。

曲は四つの楽章から出来ていますが，第三楽章と第四楽章は続けて演奏されます。

第一楽章は全曲を通じて支配する基本的な音型により始まる力強いソナタ形式の楽章，第二楽章は自由な変奏曲であり，前の楽章の激しさに比し，神秘的な静かな美しさに満ちています。第三楽章はスケルツォの楽章でありますが，むしろ次の楽章の序奏のような働きを持っています。続く第四楽章はソナタ形式による壮大なクライマックスを持つ楽章です。

音楽とコンサート・ホール

若林駿介

前回のこの新響サマー・コンサートのプログラムに，指揮者の藤田由之さんが，「矛盾の両立」というテーマで大変興味深い記事を発表していました。要するに＜音楽以前の問題＞についてのことです。

この問題を音響的な立場で考えてみると，更にいろいろなことがいえるのです。先日，やはり指揮者ですが，現在東京都交響楽団の大町陽一郎さんと話しをしたことがあるのですが，彼が次のようなことをいっていました。「ヨーロッパのコンサート・ホールは，非常に残響が多いのです。従って，たとえば，ベートーヴェンのエロイカなどを演奏する場合，おのずからテンポが決められてしまいます。あの第一楽章の冒頭のコードをジャンとやると，ワーンと残響がかえってきます。やはり，あの残響音が完全に消えないと，次の同じコードが振れませんネ。だからヨーロッパの指揮者のエロイカは，おのずからテンポがおそめで……。」

これを聴いて，私自身も技術者の立場から非常に考えさせられました。

御存知のように，コンサート・ホールにはそれぞれ，いろいろな音響的な違いがあります。東京だけでも，オーケストラの演奏会に使われるホールとしては，東京文化会館の大ホール，日比谷公会堂，厚生年金会館大ホール等が主なものとしてあげられますが，この三つのホールは，かりに同じオーケストラが演奏したとしてもそれなりの別な音がします。これは残響つまりホールの音のはねかえり状態，ステージの形，広さや造り，あるいは空間の容積などのすべてに影響されるわけですが，たとえば，日比谷公会堂などは非常に音がかたくきこえます。また東京文化会館は音の響きは大変綺麗ですが，多少つかみ所がなく，きいていてメリハリが立ちません。厚生年金会館は，この中庸を行く感じですが，音色の上では，日比谷公会堂とも東京文化会館とも違います。

もちろん，どのホールが良いかということを別にしても，これは，私自身の主観的な表現であって，皆さん方は別な感じを受けていられるかとも思います。また，これは座席の位置によっても，二階席と一階席とでは違ってきます。

更に厳密にいいますと，これはマイクロフォーンを吊って録音してみるとわかるのですが，シーズンによって夏と冬とでは，非常に差があります。冬はオーバーなどの厚手の衣類を着込んでいるので，オーケストラの音自体がオーバーなどに吸収されてしまい，残響も少なくなって乾いた音になってしまうのです。この現象は特に天井の低い，要するに空間のせまいホールでは顕著に現われます。

このようにホールによっても，シーズンによっても，更に温度や湿度などの気象状態によっても音が変ってきます。もちろん，ホールでは会場練習の聴衆の入らないときの音と本番の満員の場合では音も違ってきます。

話をもとにもどしましょう。＜音楽以前の問題＞として，それでは，まず作曲者は，自分の書いた作品が，どういう音楽状態のホールで演奏されることを頭において書いているのでしょうか。必ず，作曲の筆を進めながら頭には，ホールの音響状態についての多少のイメージがある筈だと思います。ベートーヴェンも，あの「エロイカ」を書くときにホールの残響を考えた上で，四分音符

60の速度を指定したに違いないと思います。

作曲者ばかりではありません。演奏者についても同じことがいえます。或る弦楽器奏者は，ホールによってビブラートを変えているといいます。また或るトランペット奏者は，ホールによって朝顔の方向や角度に変化をもたせているといいます。

二年程前のことになりますが，スイスの指揮者，パウル・クレッキーが来日し，日本フィルを指揮しました。彼は，大変きびしいオーケストラのトレイニングで有名ですが，ある日，会場練習のとき，またも突如１人でどなり出しました。会場は東京文化会館でしたが，要するに「せっかく何日間もかかって，日本フィルの練習所で練習し，まとめあげたものが，この会場でいざ演奏してみると，全々ホールの音響状態が違う。別の音楽を演奏しているようなものだ，バランスなど最初からやり直しだ……。」というのです。

これについては，日本は外国と違って，自分のフランチャイズされたホールをもたず，練習所だけをそれぞれが持つという中途半端な現状について考えなければいけないと思います。しかし，このクレッキーの例は，指揮者というものが，ホールの音響状態についてどれだけ気を使っているかということの一つの現れであると思います。

また，先日，指揮者のイゴール・マルケヴィッチと共に関西方面に演奏旅行をしたことがあります。この旅行のスケジュールは，日程が混んでいたせいもあってか，それぞれの会場で事前に会場練習をもつということはしませんでした。しかし彼は，会場に着くやいなや，まずステージへ歩き，すぐにホールの音響状態を調べていました。ホールの音響状態を納得してから，始めて一服し，それからおもむろに燕尾服に着かえるという毎日でした。もちろん，二，三のプレイアーはステージで音を出していました。このプレイアー達も，むずかしいパッセージを練習するということは，もちろんあったでしょうが，自分で気がつかない内に，ホールの音響状態についてもテストをしているのでありましょう。

以上のように作曲者についても指揮者や演奏家についても，音楽を造り上げる上においては，ホールの音響状態というものはきってもきれない関係にあるのです。そして，これは＜音楽以前の問題＞としての大きなポイントです。

われわれが音楽を録音するにあたっても，ホールの問題は，＜録音以前の問題＞として重要なポイントです。普通，音楽を録音するという場合に考えられることはマイクロフォーンです。マイクロフォーンを最良の位置に並べたり，マイクロフォーンの数を決めたりするのも，実はホールの音響条件によって非常に変ってくるものなのです。現在の録音は可成り高度のところまで達しています。以前のＳＰレコードの時代のときのようにメロディーを追うのがせい一杯というようなものではありません。ハーモニーは勿論のこと，細かい弦の動きや，さまざまな音色の変化などをはっきりとマイクロフォーンを通じてピック・アップしなければなりません。また眼の助けを借りなければ聴えないピアニッシモから，四管編成のオーケストラのテュッティーの最強音まで，幅広く収録しなければならないのです。

§ § § § § §
§ § § § § §
§ § § § § §
§ § § § § §
§ § § § § §
§ § § § § §

従って＜録音以前の問題＞として，先ずマイクロフォーンを選んだり並べたりする以前に，良いホールを選ぶということが，良い録音をする上の大切な条件になってきます。例えばベートーヴェン，モーツァルトのオーケストラ作品は，弦が大切だから，弦の音の美しく響くホールを，マーラーやリヒアルト・シュトラウスの作品は，ホルンの活躍するところが多いから奥行のたっぷりしたホールを，プロコフィェフやバルトークの作品は，打楽器の使い方が派手だから，音の重くない，歯切れのよい残響をもつホールを，という神経を使わなければなりません。

もちろん，これは指揮者とかプレィアー達の意見を聞いた上で決めることが多いのですが，彼等とも大体意見が一致します。

ホールの響き，音響条件は，いろいろなものによって決ってきます。まず，ホールの中の全体の容積です。これはステージ，客席を含めてのもので，天井の高さなども大きく影響します。次に壁などの材料です。以前は，吸音テックスのようなものが木板と併用されていましたが，現在はコンクリートや，音を反射する木板が多く使われています。これらの材料は，いずれも音をよく反射させます。音をよく反射させるということは残響を多くします。残響が多くなればなるほど，この残響の性質がむずかしくなってきます。たとえば，トランペットのスタッカートの音が客席にはねかえり，山彦のようにタッタッタ……となってしまっては聴きぐるしくなります。また残響が多すぎると，音がまざり合いすぎて分離が悪くなってしまいます。ヴァイオリンの低音域とヴィオラの高音域は，たとえ同じ音であっても，音色の上で違いが認められなければなりません。

よく，「ホールは楽器のようなものである」といわれます。弦楽器にストラディヴァリの名器があるように，ホールにも響きのよい優れたホールがあるわけです。よい楽器は，音色が美しい上に，楽器自身がよく鳴ります。ホールも同じことで，綺麗に鳴るホールと，そうでないホールがあるわけです。

ホールの音響ということについては，専門的にいうと，建築音響の分野に属するものです。新らしいホールを造り，これを電気音響の上でいろいろと測定した結果と，実際に楽器を演奏してみて耳で聴いた結果とは，多少のくい違いが出てくるようです。建築音響も最近急速に進歩してきているのですが，なおも両方の結果がなかなか一致しないという所に，問題点があるようですが，これは楽音という芸術上の要素，耳という感覚的な要素が複雑にからみ合っているからとも考えられます。

細かく設計された近代的なホールと，長い伝統と歴史をもつヨーロッパのホールとではやはり，その中で演奏される音楽の響きという点で相違があるようです。

音楽は，やはりホールあってのものですし，大変大切な要素です。

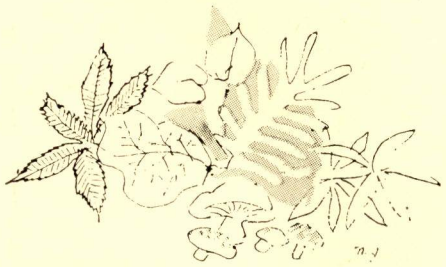
（音響技術者）

新響によせて

宇野浩二

労音オーケストラの話は前から聞いており，一度演奏会に来て見て呉れと言われていました。丁度機会があって先日の第1オーケストラの「新響サマーコンサート」を聴かせて戴きました。アマチュアのオーケストラは十数年来聴いていないのですが，新交響楽団が殆んどプロの力を借りないで相当の曲目を而も素晴らしい演奏で聞かせて呉れたので，全く驚いて了いました。実を云うとプログラムも比較的アラの出易い難曲ばかりなので，或る程度の覚悟をして来たのですが，美しい音の演奏を聴いて，最初の危惧は驚歎に変ったのです。昔のアマチュア・オーケストラの演奏会は必ず沢山のプロが臨時出演して主要な処を固め，時には○○交響楽団さながらの事もあり，そして混成部隊のため必死になって演奏することが多かった様です。新響の場合はどうしても人員に制限を受けるコントラバスの一部とハープにエキストラが入っていただけで，殆んだ全員が完全なアマチュアで占められていたと思いました。只，管楽器の音程が決まり難く，合奏の和音が乱れる事もありましたが，一般に良く響いた美しい音でした。それに対して弦楽器の響きが足りない面もありましたが，良く揃っていたと思います。これは一つには指揮の芥川さんがのびのびと気軽に音を出させる様努力なさった事にも原因があるのかも知れません。特に最後の曲目の「ボレロ」はあらゆる楽器のコンクールの様なもので，職業オーケストラでさえ全部のソロを完璧にするのは難しいとされている曲なのですが，この難曲を皆，美しい音で而も気楽に演奏していた様に思えました。勿論「田園交響曲」の様な長い曲を最後まで気分を外さないで演奏するには，大指揮者と場数をふんだ楽員の両者が揃わなければならないのですが，余分なはったりのない事に好感が持てました。

然し，新響がアマチュアのオーケストラなので，ここに一つの注文をつけたいと思います。アマチュア・オーケストラの場合，演奏者と聴衆の社会的なつながりはずっとプロの場合より深い訳ですから，職業オーケストラでは仲々望む事の出来ない聴衆との気持のつながった楽しいクラシックの音楽会を作り上げて行く様にして欲しいと思います。（尚，楽しいクラシック音楽会と云ってもウィンナ・ワルツ等の踊りの音楽や民謡等の歌の音楽は普通のクラシック演奏会のプログラムに入れないのが当然の様です。）現在の新響は既に相当の技術的水準に達しているので，敢えてこの様な希望を申し上げた訳です。ヨーロッパの様に都会が小さければ自然に聴衆と演

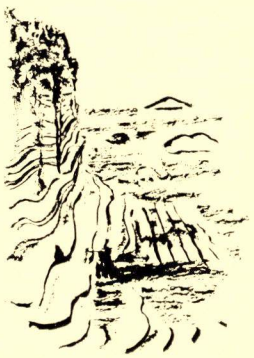


奏家に夫々親密感が生まれて来るのですが，東京のようなマンモス都市のクラシックの音楽会では自然な親密感が生まれ難いので，アマチュアで立派な演奏をする事が出来るという事は，良い音楽会を作って行く上に非常に有望な条件であると思います。音楽会は聴く人と演奏する人との共感があってこそ始めて完成されたものになるのではないでしょうか。そうすれば音楽会そのものも，曲目の難易に拘らず大変楽しいものになってくるでしょう。先日の芥川さんの司会は，余分な解説がなくて非常によかった上，指揮者が話をすると云うことで，音楽会に親しみを加えたと思います。然し出来得れば司会がなくても，音楽会がなごやかに運んで行ける事が理想でしょう。

プログラムについても一言云わせて戴くと，余り有名な曲ばかりの様な気がします。新響は相当な難曲もこなせる技術を持っていますから，職業オーケストラが何処でもやっている様な曲目ばかりでなく，ありふれていない曲もどしどし紹介して欲しいと思います。アマチュアのオーケストラですから時間的にも次から次へと沢山の曲目をこなして行くわけには行かず，楽員の希望も有名な曲をやりたいと云う方が多いでしょう。又，先日の音楽会はサマーコンサートだったという事もあり（ポピュラーコンサートは主に夏にするものですが），切符を沢山売らなければならなかった事もあったでしょう。然しその為には有名な曲は半分でも充分でなかったでしょうか。

よくプログラムを見て『知らない曲ばかりなのでね』と云われる事もありますが，若しその人達の知っている曲目でプログラムを作ったらどうなるでしょうか。というよりもその人が何曲知っていると思いますか。世の中には聴く価値のある音楽だけでも何千曲もあるのですから，10曲から20曲以外の音楽を聴こうとしないのもどうかと思います。有名な曲ばかりが人に感銘を与えるとは限りません。案外知られていない曲に面白いものが沢山あるものです。有名でないと云う理由だけで（或る批評家がつまらないと云ったというだけで）沢山の名曲を眠らして了うのは余りにも残念だと思います。職業オーケストラは色々の制約がある為，自由に曲目を選ぶ事が出来ませんので，マンネリズムになり易いのですが，新響は職業オーケストラのプログラムとは違った色彩が出せる様になる事を期待します。

毎回，初演ものを一曲加えるのも良いでしょう。それ



が感銘を与えた場合の喜びは，この上なく音楽会に対する共感を強くするでしょう。18世紀や19世紀の音楽会は殆んど曲目の大部分が新曲だった様です。特にバロック時代には演奏者自身の即興も加えられ，曲の題名すらないこともありました。ソナタやシンフォニーと云う言葉も最初は器楽やオーケストラの曲という位の意味しか持っていませんでした。昔は音楽会に聴きに行くと云うより，楽しみに行くと云う方が多かったので，特別に何の曲をやるかと云う事は余り問題ではなかったのかも知れません。現代では音楽を鑑賞する様になり，音楽会が堅苦しくなって了いました。ヨーロッパには未だこの古い風習が残っている様で，休憩にはロビーにひしめき合って立ち飲みのコーヒーなど手にして，がやがやと騒いでいる処もある位です。クラシックの音楽会は，音楽に気楽にふれて始めて醍醐味を味えると思います。音楽会に行って色々な人と会って，しゃべったり，コーヒーを飲んだりする事も音楽会を印象深いものにさせ，又見ず知らずの隣席の人と共感を分かち合う事も他の芸術では味えない喜びでしょう。ヨーロッパの様に古くて狭い劇場は，たしかにこの喜びを作るのに役立っているのかも知れません。日本では地方へ演奏に行くと，会場の古い事をしきりに恐縮がられる事があります。

もし，古い会場を恐縮するのでしたら，ローマやパリは何と多くの古い会場がある事でしょう。丁度新しいホールは新しいヴァイオリンのようによく鳴るのですが，響きが固く，古いホールは古いヴァイオリンのように味わいのある響きがするので趣きがあって好きです。東京では新響の様な団体こそ，雰囲気のある音楽会を味わうのに適しているのではないでしょうか。何時か音楽会場でない様な処でもコンサートをして見る事を提案します。学校や会社の講堂は勿論，どこかの広間でもなんでも良いでしょう。その方が音響もよく，又楽しい雰囲気が出るかも知れません。室内楽の場合ですが，ローマで聴いた三つつながった小さな図書室や階段のある書庫等での音楽会は今でも忘れる事は出来ません。費用が許せるのでしたら，聴集を沢山動員しなくてもよい音楽会を企画するのはどうでしょうか。そういう音楽会こそ本当の新響ファンを作って行くでしょう。とにかく，立派な演奏の出来る様になっている新交響楽団が今までの職業オーケストラにない特徴をもってみんなに親しまれるオーケストラとして伸びて行く事を心から願っています。

（フルーティスト）

東京労音 新響4楽団 団員募集

東京労音・新交響楽団では、団員を常時募集しています。技術のうまい、まずいはいっさい問いません。オーケストラ楽器を演奏できる方は、いますぐ参加して下さい。

◇新交響楽団は東京労音の会員で組織され、昭和31年にスタートしました。

◇新交響楽団は現在、四つの団体（新交響楽団第1～第3オーケストラ、および新交響吹奏楽団）からなっています。わたくしたちはもっと団員を増やして団体の数を多くし、また優秀な奏者に入団していただいて演奏の質を上げたいと希望しています。

◇演奏なさる楽器、演奏の技術程度によって各団体のいずれでも自由に選ぶことができます。さあ今すぐ、ご希望の団体へ申しこんで下さい。電話で結構です。また見学も自由です。

□**新響第1オーケストラ**
常任指揮者：芥川也寸志、練習場：東京文化会館（原則として土曜6～9時）

□**新響第2オーケストラ**
常任指揮者：岡田和夫、練習場：東京文化会館（原則として日曜、6～9時）

□**新響第3オーケストラ**
常任指揮者：横山千秋、練習場：東京文化会館（原則として火曜、6～9時）

□**新交響吹奏楽団**（ブラスオーケストラ）
常任指揮者：斎藤好司、練習場：東京文化会館または東京交響楽団練習場（大久保矯風会館内）

問合せ先 東京労音事務局 東京都新宿区信濃町25 Tel.（351）5191（代）

東京労音 新交響楽団第1オーケストラ第8回定期演奏会

日時	1965年12月6日（月）午後7:00開演
会場	日比谷公会堂
曲目	ワーグナー　歌劇「ローエングリン」第3幕への前奏曲 ベートーヴェン　交響曲第8番ヘ長調 op. 93 ドボルザーク　交響曲第9番ホ短調「新世界より」 op. 95
指揮	芥川也寸志
演奏	東京労音新交響楽団第1オーケストラ
会員券	200円　本日会場受付及び東京労音事務局で取扱中

東京労音 新交響吹奏楽団第6回定期演奏会

日時	1965年12月10日（金）午後7:00開演
会場	渋谷公会堂
曲目	ワーグナー　楽劇「ニュールンベルグの名歌手」より行進曲 ドビュッシー　夢 ハワード　漂う海 ビリック　マーチ「ブロックM」 アンダーソン　ホームストレッチ テヒドール　スパニッシュ マーチ（アンパリード・ロカ） ゴタード　カンツォネッタ ドン ギリス　交響的肖像「タルサ」
客演指揮	芥川也寸志　　指揮　斎藤好司
演奏	東京労音新交響吹奏楽団
会員券	200円　本日会場受付及び東京労音事務局で取扱中